

河川生態学術研究会の長良川現地視察会及び 第27回河川生態学術研究発表会

元自然環境グループ 研究員 間瀬 皓介

1. はじめに

当研究所が事務局を務める河川生態学術研究会（以下、研究会）の活動として、令和7年度に開催した「長良川現地視察会」と「第27回河川生態学術研究発表会」について報告します。

この研究会は、平成7年に生態学と河川工学の研究者が共同して創設したもので、河川における生態系の解明とその上に立った河川管理について研究、議論するとともに、次世代を担う研究者を育成することを目的に取り組んでいます。

2. 長良川現地視察会

2.1. 現地視察

研究会には、対象河川・流域に応じたテーマを設定してプロジェクト研究を進める複数の研究グループが参加しています。研究会は、毎年、これらの河川別研究グループのフィールドを順に視察しており、実際の調査箇所の状況とあわせて研究内容を理解し、より具体的な議論を行うことで各研究の質的向上に役立てています。

今回は、萱場祐一教授（名古屋工業大学）が代表を務める長良川研究グループのフィールドである長良川流域を対象とし、令和7年10月16日に現地視察、17日に意見交換会を行いました。

現地視察では、まず長良川研究グループの主な研究対象である大縄場大橋下流において、萱場祐一教授、戸田祐嗣教授（名古屋大学）、原田守啓教授（岐阜大学）、永山滋也准教授（長野大学）より、研究サイトの概要、植生動態モデル、長良川中流域における砂州地形の変遷及び高水温時における淵の避難場機能等について説明がありました。

また、志津野谷戸においては、片桐浩司講師（帝京科学大学）、森照貴センター長（土木研究所）から、谷戸の環境とトンボ類・淡水魚類などの生物多様性との関係や、谷戸・未利用田による流出抑制効果等について説明がありました。

このほか、現地視察では、河川管理者である木曽川上流河川事務所から、池尻地区における遊水地事業の取組みについて説明がありました。また、岐阜県からは、濁水や魚類に配慮した河道掘削事業、魚道の機能回復に向けた自然共生工法の取組みについて、関市からは、田んぼダムの実証事業をはじめとする流域治水の取組みについて説明がありました。今回の現地視察は、長良川本川だけでなく、流域治水の観点から周辺の田んぼや谷戸を含めて視察したことが特徴的でした。



写真1 現地視察の様子
(志津野谷戸)

2.2. 意見交換会

2日目に、岐阜キャスルインの会議室でプロジェクト研究についての意見交換が行われました。長良川研究グループは、「気候変動及び流域治水シナリオに基づく生物多様性の評価とハビタット管理手法の提案」を研究テーマとしており、研究内容に加えて、河道掘削に対する河川の応答やシフティング・モザイク概念を用いた動的な環境の評価など、今後の研究の方向性や川づくりの観点からも議論が交わされました。



写真2 意見交換会の様子

3. 第27回河川生態学術研究発表会

3.1. 研究発表

令和7年11月13日に東京証券会館にて開催しました。会場での対面とオンラインを併用するハイブリッドでの開催としたことで、遠方からの参加が容易になったこともあり、約460人と多くの皆様に参加いただきました。

プログラムの前半では、個別の河川・流域を研究フィールドとした5つの河川別研究グループ（吉野川他、富士川、長良川、千曲川・信濃川、筑後川）と、若手を主体とした横断的なテーマで研究を進める総合研究グループ（攪乱研究チーム）から口頭発表が行われました。これらの研究グループは、生態学と河川工学の研究者が連携して研究を進めているのが大きな特徴です。様々なフィールドを対象とした多様な切り口の研究発表があり、河川生態に関する最先端の幅広い研究内容を一度に見聞きできるのが発表会の大きな魅力となっています。

参加者にご協力いただいたアンケート結果によると、総合研究グループ（攪乱研究チーム）、千曲川・信濃川研究グループの研究発表により多くの関心が集まっていたことがわかりました。

表1 河川別研究グループによる口頭発表

研究グループの発表 ※敬称略
吉野川他研究グループ／代表 鎌田 磨人（徳島大学大学院 教授） 「吉野川支川・飯尾川における流域治水システム」
富士川研究グループ／代表 大槻 順朗（山梨大学大学院 准教授） 「多様な扇状地河川を有する富士川流域における治水と環境を両立する流域治水策の検討に向けた研究」
長良川研究グループ／代表 萱場 祐一（名古屋工業大学 教授） 「河川における陸域環境をどう捉えるか？—長良川大縄場大橋下流砂州における群落クラスターの構築—」
千曲川・信濃川研究グループ／代表 箱山 洋（長野大学 淡水生物学研究所 教授） 「河川における生息地連続性の重要性—河川生態系への影響評価および保全方策—」
筑後川研究グループ／代表 鬼倉 徳雄（九州大学大学院 教授） 「大規模攪乱後の生態系回復・その後の災害復旧の影響」
総合研究グループ（攪乱研究チーム）／代表 三宅 洋（愛媛大学大学院 教授） 「出水攪乱に対する生物応答の事例集積と攪乱外力評価手法の適用・開発」

続くポスターセッションでは、4つの河川別研究グループ、総合研究グループ（攪乱研究チーム）から計30件のポスター発表をいただき、活発な議論が交わされました。ポスター賞を設けており、高知大学比嘉基紀准教授（河川砂礫堆上の植物群落の生活史戦略性と立地環境：高知県仁淀川・物部川の事例）が最優秀賞、名古屋大学大学院戸田祐嗣教授（河道掘削に対する陸域環境の応答予測に向けた植生動態モデルの構築）及び東北大学大学院加藤駿氏（アユが河川生態系に及ぼす影響について）が優秀賞を受賞されました。

ポスターセッションは、オンラインで参加できないことから、より多くの皆様の会場での対面参加が期待されます。

3. 2. 話題セッション

プログラムの後半は、「これからの河川生態学術研究～河川生態の魅力を探る～」をテーマにパネルディスカッションが行われました。研究会発足30周年を迎えた背景を踏まえ、流域全体での水域ネットワークや氾濫原の保全・復元の重要性、気候変動が生態系に与える影響と長期モニタリングの必要性、定量的な河川環境目標に基づく順応的管理の推進や研究成果の実務への実装等に関して話題提供をいただきました。

その後のパネルディスカッションでは、定量的な河川環境目標の実装に向けた予測と順応的管理のサイクル化の難しさ、周辺水域を含めた流域全体でのエコロジカルネットワークの構築、土砂動態や地下水・海との繋がりを含めた3次元的な機能評価、ホットスポットの保全や基礎研究の継続等、多岐にわたる内容の議論が行われました。

アンケート結果では、今回最も関心の高いプログラム項目であり、研究成果の実装に対する意欲的な意見が多く寄せられました。

表2 話題セッションの登壇者

話題セッション ※敬称略
コーディネーター： 萱場 祐一（名古屋工業大学教授）
パネリスト： 宇野裕美（東北大学大学院准教授） 鬼倉徳雄（九州大学大学院教授） 戸田祐嗣（名古屋大学大学院教授） 皆川朋子（熊本大学大学院教授） 三宅洋（愛媛大学大学院教授） 森照貴（土木研究所自然共生研究センター長）



写真3 話題セッションの様子

4. おわりに

当研究所では、引き続き研究会の運営を通じてその活動を支えるとともに、研究発表会やウェブ、SNS等で河川生態の研究成果や河川管理に活用できる情報を発信し、社会実装にも積極的に取り組んでいきます。